

行為一意識・無意識

文学研究科哲学専攻博士後期課程3年
岡本さゆり

要旨

本稿ではまず、意識のさまざまな様態の中の一つである意志と行為について考える。だが、思考や願望その他を含む深奥で複雑な意識の内容から意志だけを抽出することは困難であり、言葉のあいまいさはもとより、はたらきの度合いとしても明確にはならない。また、行為は行為がなされるまでは行為が確定せず、常に未決定を含んでいるという現実の事態を踏まえて、行為の動機としての意志にどれほどの有用性があるのかを検討する。

本稿のねらいは、新たな自己を生み出す可能性の萌芽が、まさに行為に内在されていることを明らかにすることである。この考究の基礎には、現に行われつつある行為のプロセスの解明が求められるが、本稿ではその一つの方法である神経生理学的な観点を取り入れて行為を再考する。特に、行為において無意識は意識に先立つという科学的な実験結果を基に考察を加え、実践行為における「意識と無意識の相互乗り入れ」を提示し、これについて吟味する。

本文

1. はじめに

一般的に、行為はその契機や動機としての意志や目的が前提されるか、あるいはそれらを伴った行為のみがわれわれの自主的自発的行為と考えられている。それ故、意志や目的を持たない行為は、押し付けられた行為とみなされるか、または、初めから等閑に付されて考慮されることがなかったのではないかと思う。だが、意識的エレメントとしての意志や目的は、行為においてどれほどの有用性をもつのだろうか。意志や目的を否定しているのではない。しかし、われわれの日常生活には、明確な意志や目的なしに行われる行為が少なくない。例えば、ふと何気なく時計に目を遣る行為は、見ようとする意志や、時間を確認する目的がなくても成立する。また、テーブルに並んでいる食べ物を口に運んで咀嚼する行為にも、常に

明確な意志や目的があるとは限らない。それらにおいては、生活行為の習慣化や、われわれの脳およびDNAに組み込まれた生命プログラムの作動が大きくかかわっており、その生活行為の習慣化はある意味では意志の持続化と言え、また、生命プログラムの作動は生きようとする合目的なはたらきであると言えるが、仮にそれだけなら決定論的な見解から逃れることが出来ないだろう。

本稿ではまず、意識のさまざまな様態の中の意志について考察し、目的については別紙に譲るが、何れの場合もすでになされた行為を遡及的に辿り、その原因としての意志や目的を求める方法は採らない。原因を‘知る’ことによって行為が現出するなら、原因の究明は意味を持つものとなるだろうが、‘知る’ことは‘行為する’こととまったく別だからである。また、行為を因果論的な枠組みに収めることによって、すっきりとした行為の解説に成功したとしても、それが日々新たに展開されるわれわれの実践の行為にどれほど寄与できるか疑問である。すべての現象が何らかの原因をもつということは確かであるが、因果論で説明出来るのはすでに完了した行為についてである。Aの意志が原因でA'の行為が行われた場合、Aの意志とA'の行為のあいだに因果関係を認めることは可能だが、これから起こる行為については、Aの意志と想定されるA'の行為との因果は必ずしも保証されない。何故なら行為は行為が実行されるまでは行為が確定せず、常に未決定を含んでいるからである。意志を持つことでその結果としての行為が保証されるなら、禁煙に失敗する人はいないはずである。仮に因果関係 $A \Rightarrow A'$ が成立したとしても、一つの事象がそうであったというに過ぎず、A'を予見してAを意志しても空振りに終わる可能性は少なくない。これらを踏まえた上で、行為の動機としての意志にどれほどの有用性があるのかを検討する。

本稿の中心をなすのは、神経生理学的な観点を取り入れて行為を再考することであり、特に、行為において無意識は意識に先立つという科学的な実験結果を基に考察を加える。意識や無意識という言葉（概念）は、それらが語られる文脈において様々な意味を持つが、本稿において意識という言葉は、思考、感情、知覚、情動、願望、意志などを含む包括概念として扱う。一方、無意識は知覚や認識で捉えられず、その内容や実態についての言語化が困難であるが、われわれは身体というフィールドにおいて、意識が無意識にはたらきかけ、無意識が意識にはたらきかけることを直観的に感じ取ることが出来る。それゆえ、意識と無意識は両者の交わりを持つ和集合、あるいは分断できない一つの総体とみなして議論を進めるが、意識も無意識もその存在証明は出来ない。存在証明が出来ないことは、これらの説明の一切が妄想でありうることと同義であるが、少しでも納得のいく妄想を作らなければならない。

およそ行為を巡る如何なる分析的な手続きも見当違いを免れないが、言葉による型抜き以外に論を進める手立てはないので、まずは意志から始めようと思う。

2. 意志することは行為か

意志の広義的な意味としては、「世界に対する主体の態度決定¹⁾」と言う、ウィトゲンシュタインの言葉がひとまず妥当するだろう。また、ウィトゲンシュタインは、「世界は私の意志から独立である。仮に我々の望む全てのことが生起したとしても、このことはやはり、いわば運命の恩寵にすぎないであろう。何故なら意志と世界との間には、このことを保証するような論理的な連関は存在しないからである²⁾」と述べており、自らが意志することと世界の間には埋めようのない溝があることをウィトゲンシュタイン自身が感じ取っていたようである。あるいは、「世界の出来事を私の意志によって左右するのは不可能であり、私は完全に無力である。私は出来事への影響を専ら断念することによって、自分を世界から独立させることができ、従って世界をやはり或る意味で支配しうるのである³⁾」と述べているが、断念は欲望の変形でしかなく、また、自己を世界から独立させることは空想の世界で可能であっても、このわれわれの現実の世界では全く不可能である。

一方、ウィトゲンシュタインは意志を善悪の担い手と名付け、以下のように論じている。

人間の意志については一体どんな事情なのか。私は何よりもまず善悪の担い手を「意志」と名付けよう。……さてこの〔倫理的な意味での〕意志と、人間の身体を動かす意志との間に原則的な相違はあるか。それともこの場合、願望すること（及び考えること）が既にやはり意志の行為である、とする点に誤りが存するのか⁴⁾。（〔〕内筆者、（）内及び、傍点原著）

この「倫理的な意味での意志と人間の身体を動かす意志との間に原則的な相違はあるか」と言う叙述には、倫理的な意味での意志と身体を動かす意志の二元化が前提されており、心身二元論的な見解を窺わせるが、ウィトゲンシュタインは注意深く断定を避け、さらに自問自答を続けている。次の「願望すること（及び考えること）が既にやはり意志の行為である、とする点に誤りが存するのか」と言う真摯な問い掛けには、二通りの解釈が出来るだろう。一つは、願望する・考えることを意志の行為であるとすることの否定であり（願望する・考えること≠行為）、もう一つは、ウィトゲンシュタインが「意志の行為」を形容矛盾と捉えていた場合、願望する・考えることと意志を同格に扱うことの否定である（願望する・考えること≠意志）。前者は、「意志行為は決して肉体に関係せず、従って語の日常の意味での意志行為は存在しない⁵⁾」という言説と焦点を結んでいる。同様に、後者は、「願望することを行うことではない。しかし意志することは行うことである⁶⁾」という言明に繋がっている。おそらく、この二つの解釈の真偽は、‘どちらか (either-or)’ではなく、‘どちらも (both-

and) であり、意志と行為を巡る問題はウイトゲンシュタインにとっても容易ではなかったことが窺える⁷⁾。

ともあれ、拙稿の主眼は行為であり行為論であるから、言語分析的な論点に深入りするつもりはないが、意識のはたらきとしての強度や割合の違いによってグラデーション化した漸次的移行には、夢・希望・期待・欲求・意欲・意志・意図・信念・決意などが配置出来るだろう。だが、何れの言葉の線引きも明確ではない。もとより、われわれの日常生活において、一瞬たりとも動きをやめない意識や心のはたらきを、言葉や概念で固定化することに無理が生じているのである。現実の事態に何らかの言葉をあてがって安心し、しかしまた、そのことによって新たな不安を生み出すような混乱は避けなければならない。

さて、行為論の基礎には、現に行われつつある行為のプロセスの解明が求められるが、以下ではその一つの方法である神経生理学的な観点を取り入れて行為を再考する。

3. 行為の神経生理学的な考察

この節では、二人の神経生理学者、リチャード・ユング⁸⁾とベンジャミン・リベットが行ったそれぞれの実験結果を基にして議論を進める。神経生理学では、1965年にKornhuberとDeeckeによって、Bereitschaftspotential : BPと呼ばれる脳波を用いた準備電位が報告されて以来⁹⁾、人間の随意動作における中枢機構の研究が進んでいる。拙稿で、もはや神経科学の古典とみなされるかも知れない彼らに光を当てるのは、彼らの研究の成果が未だに色褪せては見えないからであり、むしろ新鮮な驚きをわれわれに与えてくれるからである。

まず、R. ユングの論文、“*Postural support of goal-directed movements : The preparation and guidance of voluntary action in man*¹⁰⁾”（「目標到達運動に関する姿勢維持—ヒトの随意運動における準備と誘導」）を見ることにする。同論文はヤングの『哲学と脳』で採り上げられ、わずかではあるが訳出されている¹¹⁾。だが、そのほとんどが要約であるため、以下で挙げる同論文からの引用文の訳は筆者によることを断っておきたい。

R. ユングは、被験者が台の上に立って、目標物を指さしたり、叩いたりする随意（自発）運動に伴う脳・筋・眼球の変化を、それぞれ脳波（EEG）、筋電位図（EMG）、眼電位図（EOG）などによって記録し、ヒトの動きにはどのような事態が生じているのかを検証した。同論文には行為・意志・意識・無意識にも関わる興味深い報告がなされている。実験で明らかにされたヒトの動きに関する時間的順序は次のようである。（原文ではポイント事項のみが書かれているだけであるが、事象を理解しやすいように多少補足した。）

- ① 両側の前頭頭頂部の [大脳] 皮質で準備電位が記録される。
- ② 目標物を注視するための眼球のサッカード¹²⁾ が起こる。

- ③ 台の上で姿勢（体位）の変化が生じる。
- ④ 胴の筋の準備神経支配が生じる。
- ⑤ 足の筋の姿勢安定がなされる。
- ⑥ 腕が上がり始める。
- ⑦ ねらい付け電位が準備電位に重なる。
- ⑧ 身体の回転が起こる。（[目標物を指さしたり、叩いたりするために腕を] 伸ばすときに最大になる。）
- ⑨ 目標に向かって、最終の腕の伸展がある。
- ⑩ 目標に到達した後に、[大脳] 皮質で陽性の電位が記録される。

…… [このうち] ②と⑨の目標に向かう目と腕の動きだけが、意識的になされたものであり、他のすべてのプロセス（①、③－⑧、⑩）は練習によって自動化された、または、反射によって調節された無意識の協応（coordination-s）である¹³⁾。

①については、目標物を叩こうとする随意運動の約1秒前に脳の準備電位が記録されたことが、他の箇所でも詳述されている¹⁴⁾。われわれの随意運動でさえも意識がはたらく以前に脳の活動があり、それはリベットも指摘したように無意識での始まりである¹⁵⁾。運動関連脳電位（MRCP）に関する最近の研究では、左右上肢と下肢の単独随意運動において、その随意運動の約1.75秒前に前出のBP成分の陰性変動が確認されている¹⁶⁾。

②について若干の補足をすると、被験者が目標物を目で捉えた後はそれを注視して、叩こう（指さそう）とする自分の手の動きを目で追わないように事前に指示されている。これは、眼電位図（EOG）によって脳波（EEG）への悪影響（contamination）を避けるためである¹⁷⁾。また、③－⑧の事象経過から、人間の動き・行為における姿勢の保持は重要であり、優先順位も高いことが分かる。この姿勢の保持については、「考察」でも詳しく述べられているので以下に引用する。

人間の動きは四足の動物よりもバランスの保持がさらに精巧である。転倒しないように、重心は常に地面上の足の位置の真上に垂直に保たなければならない。この調節は姿勢保持の事前のプログラムによって準備、促進される。これらの姿勢〔保持〕のプログラムは随意運動が始まる前になされる。われわれの実験では、これらが準備神経支配として、胴と足の筋の筋電位図（EMG）に記録される。これは、姿勢保持の優位についての、例のHessの仮説を確証している¹⁸⁾。

随意運動が始まる前に、無意識のうちに重心を取る（バランスを取る）準備段階があると

ということには少なからぬ驚きを覚える。目標物に対していきなり腕が伸びるのではなく、おそらくは重心の移動を含めた、その動作にふさわしい体勢が一度作られ¹⁹⁾、最終的に腕が伸びるといふ一連の動作が数秒のうちになされるのであるから、それがほとんど無意識のはたらかきであるというのはむしろ合理的な説明であり、同時にわれわれの経験に裏打ちされた事実なのかもしれない。例えば、目の前の本を手を取ることで、われわれはその動作の一つ一つを意識している訳ではなく、意識すると却って動きがぎくしゃくすることは誰にでも経験があるのでないだろうか。身体の動きが芸術であるダンスにおいてもバランス保持は重要であり、物理学者のケネス・ローズは以下のように述べている。

垂直からわずかな角度 θ_0 だけ傾くと、[ダンサーの体をモデル化した]棒は倒れ始め、角度 θ は加速度的に増加する。……注目すべきは角度増加の速さで、一度垂直から最初に加速度がつくと、2分の1秒ごとに2倍の角度になるのだ。最初の傾きの角度が比較的小さい場合でさえ、バランスを崩すまでの時間は非常に短く、わずか2秒程度である。ダンサーは最初にできるだけバランス状態に近いところにいるか、あるいは垂直から離れ過ぎて修正できなくなってしまう前に素早く適切な動きを行ってバランスの調節を確実にしなければならない²⁰⁾。

先のR. ユングも述べた「垂直」は、ここでもバランスと密接不可分に語られている。「垂直」をさらに内実的に言えば、「重力に従う」と表現出来るだろうが、合理性、機能性の面においても「垂直」は身体にとって重要である。さて、このケネス・ローズの言葉からイメージされるのは、もはやバランスの調節さえもそのなめらかな流れの中に組み込まれているようなダンスである。訓練によって、身体の動きの自動化や調整が芸術の域にまで達した時、それを見る人を感動させずにはいられないのかもしれない。ダンス鑑賞やスポーツ観戦などで深い感銘が湧き上がるのは、人間の可能性の拡がりが見え、目の前で展開されていることへの畏敬と驚きが含まれているだろう。ここで言う自動化は字義通り、おのずと動くということであり、self-、auto- の両義性を実質的にもっていると考えられる。

神経生理学者のJ. A. ホブソンは本能や第六感、身に染みついた感覚などを「非意識」と呼んだが、彼によれば、戦いの最中といった極端な状況の中で、必要に応じた行動や、認知的反射による行動がとれるのはこの「非意識」があるからだと言う²¹⁾。彼は、「意識に変換可能な無意識と意識には変換できない非意識」という区別をしているが、一方で彼自身が、意識・無意識・非意識という語のあいまいさを認めてもいる。

意識を経由せずに身体の調整がなされる時、身体は意識を意識しないし、遅れてやって来る意識は動きの邪魔にさえなっている。ダンスのような芸術、スポーツ、あらゆる分野のワザや技術には、「からだで覚える」という共通の基本があると思うが、先のR. ユングの実験

で、目標物の最初のねらい付けと最後の腕の伸展のみが意識的な動きであり、他の過程は練習によって自動化され、反射によって調節された無意識の協応であるという指摘は、それを裏付けてなお余りある。

次に、話題を戻して、拙稿の前節で問題にした意志と行為について再考したい。R. ユングは「随意的なねらい付けとタイミング」のセクションで、次のように述べている。

随意運動において、意志の力は[その]開始、目標の方向、時間的な操作に限定されている。他のすべての協応 (coordination-s) は、練達した行為を習得した後のニューロン組織によって導かれ、自動的に発生する。われわれの実験で、意志は見ることと動くことの開始の引き金を引いている。……ボクシングのパンチや指さし行為のような、あらゆる目標到達の練達された動きは、目標物の決定、[動作の]開始と速度のタイミングだけが意志の力であり、他のすべては自動化されている。精確にコントロールして目標を人さし指で指さすことでさえ、学習し自動化された無意識の神経支配からなる。それゆえ、意識的な決意や[視覚による目標物の]モニタリングは限定的なものである。一連の微妙な動きの意識的なコントロールは、おそらく[練習によって]自動的機能が習得されるまで、練達された運動の最初の企図においてのみ現れる。意志は、[動作の]練習や[それが]自動化された後に、ニューロンや筋組織によって無意識になされる習い覚えた多くの動きのメカニズムの連携を開始するのである²²⁾。

R. ユングのこの実験は、目標到達運動の自動的な学習における練習や練達に関わる生理学的なプロセスを検証することがその大きな柱である。また、上記の結果は、10人の被験者に28回のゆっくりした指さし運動と素早いパンチングのテスト²³⁾から導出されたのであるが、R. ユングの言う「練達された (skilled) 行為・動き」がどの程度のものであるのかは判然としない。さらに、不随意の運動については、おそらく検証そのものが困難であると考えられる。だが、随意運動における意志のはたらきの限定性は、ここにおいて明白であり、意志のタスクは運動・行為の引き金を引く、目標物を見定める、叩く(指さす)速度のタイミングを図ることのみである。

運動・行為の引き金役としての意志、という扱いはデリケートな問題を含んでいる。行為において無意識は意識に先立ち、意識(意志)がはたらく以前に、すでに無意識の陰性準備電位の変化が脳内で生じていたことを確認した自らの実験結果と微妙なズレが生じているのである。つまり、行為の引き金を引いたのが意志なのか、むしろ意志は無意識によって引き金を引かされたのか、明白にはならないのである。

意志に行為の引き金役の役割を持たせた神経生理学者は他にもいる。先にも挙げた、ベンジャミン・リベットである。彼の成果は、すでに生物学、精神医学、複雑系科学などのさま

ざまな分野に亘って援用されている²⁴⁾。「自由で自発的な運動に至る準備の起動は脳内で無意識に始まっており、『今、動こう』という願望や意図の意識的なアウェアネスよりもおよそ四〇〇ミリ秒かそれ以上先行していることを、私たちは発見し、明らかにしました²⁵⁾』と言うリベットの見解は確かにインパクトがある。だが、この事実は新たな問題を生んだ。もし願望や意図などの意識的なはたらきより以前に脳の活動があるなら、「その自発的な行為を実行する際に、意識を伴う意志には何か役割があるのでしょうか²⁶⁾』という彼自身の問いである。それに答えるためにリベットが講じたのは、意志に二つの機能を持たせることであった。一つは、「行為の意識的な拒否」、もう一つは「行為を実行するために必要な引き金の役割」である²⁷⁾。

リベットは行為の実行またはその行為の拒否を選ぶのは意識を伴った意志であると考え、意志に「行為の意識的な拒否」の役割を与えた²⁸⁾。行為の選択における無意識の先行に意識がどう関わるのかという問題に彼は苦慮し、最終的な実行に関する行為の拒否権を意識が持つということに折り合いを付けたのである。だが、これですべてが解決されたわけではない。自由意志とは何か、あるいは無意識とは何かという問題が浮上する。リベットは意識的なコントロールの可能性がなければ、無意識に実行する行為について、その人への責任を問わないという立場を明らかにしている²⁹⁾。脳内で意図的な行為全般を整理すると考えられている尾状核のドーパミンに対する過剰な反応が原因とされるトゥレット症候群の患者の無意識の行為³⁰⁾、さらに健常者の無意識の行為、その何れについても、行為の責任を負わなければならない自由意志に基づく行為とみなすことに、リベットは異を唱えているのである。だが、トゥレット症候群のような器質的な障害を持つ場合とそうでない場合は、同じ無意識の行為であったとしても分けて考えられるべきなのではないかと思う。器質的な障害を持つ人々の無意識の行為については考慮されるべき点が多々あり、リベットの主張は肯定されるが、器質的な障害を持たない行為主体についても、自由意志に基づく行為についてのみ責任が問われるなら、責任を問えない相当多くの抜け道が用意されることになるのではないかと危惧する。行為の帰責性については問題が大きく、ここで詳細に論じることは出来ないが、無意識の行為が心神喪失ではなく、心神耗弱でない限りにおいて、無意識の行為の責任と意識的な行為の責任は同等に扱われるべきであると思う。何故なら、無意識の行為の行為主体・エージェントは例外なく‘その人’であるからである。意識が量化も可視化も出来ないことは事実であり、行為主体の意志や意図の多寡は客観化の問題としても残るのであるから、特に罪に問われるような犯罪行為においては、如何なる行為がなされたかが厳密に問われるべき事象であると考えられる。情状や心理面を重視する見方からすれば、この考えは極端であるかもしれないが、行為の帰責性について、無意識の行為を充分考慮に入れた論議が行われることが期待される。

さて、「行動しようとする衝動の拒否」は、われわれの日常でよく経験され、実験で検証

もされたが、その実験は限定的なものであり、リベット自身が次のように述べている。

自然発生的な拒否においては、電気的な筋肉の活性化がなく、そこを起点に時間を遡って何秒という時点の頭皮の電気活動をコンピューターに記録させることができないわけですから、このことは検証できません。したがって技術的に、あらかじめ予定した時間に実行するように計画された行為の拒否に関する研究だけしか、行うことができません³¹⁾。

これはリベットがかなりの紙幅を割いて論述した、われわれの意志の機能の一つである「行為の意識的な拒否」がやはり仮説上の役割であることを暗に示しているのだろうか。また、もう一つの「行為を実行するために必要な引き金の役割」については、以下のように述べている。

意識を伴った意志にはもう一つの潜在的な機能があります。それは、意識プロセスが最終的な行為へと進行し、行為を実行するために必要な引き金として働くことができることです。このように意識を伴った意志は、運動行動を能動的に生み出す役割を果たすことができます。この意識を伴った意志についての仮説上の役割は、実験的には立証されていません。ある程度「自動的に」なじんだ行為ならば、そうしたい、という報告可能な自覚ある願望なしに実行可能なのです³²⁾。

リベットは行為の最終的な決断（実行しないか・実行するか）を意志が担うと考えた。自らの実験によって示された、行為における無意識の先行に抗うためには、意識を伴った自由意志の出番を設ける必要があったのである。だが、一方でリベットは「偉大なアスリートたちは概して、意識的な心に妨げられることなく、彼らの無意識の心に主導権を委ねることができる³³⁾」と述べ、意識に依存しない無意識による行為を高く評価している。リベットに拠れば、無意識の精神機能が、より持続時間の短いニューロン活動によって生み出されている場合、その精神機能はより速いスピードで進み、この無意識プロセスが個々の短いプロセスを次々と処理し、困難なステップをクリアしていくというのが無意識プロセスの一連の流れのようであるが³⁴⁾、これはアスリートたちの無意識の行為の一つの側面を示しているだろう。さらに、上記の引用文の後半で語られた「自動的になじんだ行為」は、アスリートたちの「無意識の心に任せた行為」とオーバーラップさせて考えることが可能である。これは、R. ユングが「結論」で述べた、「[目標到達運動は] 意識的に意志された行為によって始まるのではあるが、学習された姿勢の神経支配は無意識の自動化されたプログラムである³⁵⁾」という主張に重なる。

夾雑物としての意識が入り込まず、無意識によって一連の行為がなされる場合、つまり、自覚や願望なしの行為、自動的になじんだ行為は脳の経済にも有効であり、端的に現実を掴んで対応することが出来るのではないかと考えられる。リベットは、この「無意識の心に主導権を委ねた行為」をアスリートだけではなく、芸術・科学・数学などの創造的なプロセスにもあてはめて一般化できると考えたが³⁶⁾、これをさらにわれわれの日常生活にまで拡張するためにはどうすればいいのだろうか。

4. とっさの行為

先のR. ユングの実験の場合、目標のものを叩くという課題に沿った動きであるから、その（目標のものを叩くという）意識がなければ、叩くという行為は成立しない。だが、この随意運動においても、無意識は意識に先立ち、意識がはたらく以前に、すでに無意識の陰性準備電位の変化が脳内で生じていた。一方、われわれの日常には、「～しようと」意識して行為する場合と、言わば当初から無意識のとっさの行為がある。本節では、このとっさの行為について考察する。

あらためて断るまでもないが、とっさの行為は、病気による不随意運動や夢遊病（夢中遊行症）とは区別される。また、われわれの日常におけるとっさの行為は瑣末な事象であり、学の対象にはなり得ないのではないかという疑義が生じるかもしれないが、結論から言うなら、われわれの日常はとっさの行為の連続であり、それを照らし出すことが無意味であるとは思えない。仏教的な考え方を持ち出すまでもなく、われわれは消滅と生成の絶え間ない変化の中で常に判断を求められ、とっさの行為を余儀なくされているのである。われわれの人生に演劇や映画の芝居のような台本はない。同じことの繰り返しに見えるありきたりの日常でさえも、われわれ自身が変化し、取り巻く環境も常に変化しているのであるから、一度として同じであったことはない。とっさの行為のさらに顕著な例は会話に見られるだろう。会話は意識的な部分と無意識的な部分との織り合わせであるが、ト書き入りの台本を読むようになされた会話より、たった今言葉が産み落とされたような新鮮な会話には魅力がある。聞き手が発話者の予想を超えた意外な反応をすることは少なくなく、「当意即妙」は一つの才能であるが、この才能に磨きをかけるのは簡単ではない。何故なら、意識的な言葉遣いや論理の構成は訓練を積んで上達することが可能であるが、無意識のレスポンスは訓練出来ないからである。とっさの変化に対応出来るかどうかはわれわれの人生を大きく左右し、決して軽視されるべきではないのである。

われわれのとっさの行為、例えば転びそうになった時に手を付くことや、飛んできた虫を振り払うというようなことなどもそうであるが、ここには本質直観³⁷⁾の拡張された一つの機能がはたらいている。おそらく本質直観は学習や経験の積み重ねによって形成されるので

はなく、ホトトギスやカッコウなどの鳥や一部の魚などにも見られる「托卵」のような、誰から教えてもらったのではないが、生存にかかわる本質的な智慧というようなものであり、とっさの行為がなされた後に遅延して到来する意識のはたらきとは別に考えた方がよさそうである。

また、とっさの行為に学習や経験の積み重ねが活かされている場合がある。例えば、会いたくないと思っている人物がエレベーター待ちをしているのが目に入った途端、足がエレベーターではなく階段に向かっているというような場合である。日常の挨拶は習慣や訓練によるところが大きく、人に会った時自然に挨拶がなされているような場合ももちろんある。これらは過去の経験に基づく快・不快、好き・嫌いなどの感情や「～しないと気持ちが落ち着かない」などの身体感覚が伴った、どちらかと言えば学習効果的な行為であるが、先の本質直観と同様に、この場合も、意識より先に無意識あるいは身体が動いてしまっている。

浜田は『身体から表象へ』で、「人は自分の意識（意志）でもって行動を決定しているかのように思っていますが、実際にはそれ以前のところで、そもそも身体のほうが先に動き出している、そういう領域が私たちが思うよりずっと広いのです。それに身体がやり方をすでに身につけているものでなければ、いくら意図しても、その意図だけでは身体は動きません。たとえば鉄棒の逆上がりをしようとしてそれができるのは、身体がそのやり方をおぼえているからにはほかなりません³⁸⁾」と述べているが、身体のほうが意識より先に動き出している領域には、浜田が叙したような、身体がやり方をすでに身につけている場合と、一度も経験したことがなく、やり方も知らないのに身体が反応している場合の両方があるだろうと思う。後者の例を挙げよう。電車が駅のホームに迫り来る中、線路に落ちた人を救助した勇敢な人々は、以前に同じように人を救助したことがなくても、とっさの行動が取れたと見る方が自然である。過去の経験や体験がなくても全く新たな局面に対応できているのである。意図したことが意図したように実行可能かどうかは派生的な問題であり、鉄棒の逆上がりが出来た時だけが行為ではなく、何度も鉄棒にぶら下がっては空を駆けるような、自分としては情けない事態もまた立派な行為と言えらるだろう。

この身体的記憶はわれわれのDNAに組み込まれた自分の与り知らぬ過去にまで遡ることが原理的には可能だが、仮に記憶がなければ行為がなされないとするなら、人間の新たな可能性が閉ざされてしまうことになるだろう。無論、人間の可能性は負にはたらく場合もある。行為の場面における新たな可能性は、それが行為であるが故に容易ならざる事態を常に含んでいる。

誤解のないように再度述べるなら、記憶による行為を否定しているのではない。「手続き記憶」と呼ばれる内示的な記憶³⁹⁾が、行為にかかわりをもつことはわれわれの生活体験からも明らかである。だが、記憶という介在がなくても行為が行われることが見落とされることは避けたい。行為を意識の側から科学的に説明するなら、行為の原因は必ず措定されなけ

ればならず、しかも行為が身体という独立した物体でなされるということはあるから、行為には意識あるいは心は何らかの形で関与していることが必然的な要請として語られるということは十分に理解できる。そのことに問題があるわけではないが、行為を意識の側からではなく、分離不可分な心身がなしている行為それ自体に一体何が起きているのかを探ろうとする時、おのずと記述される内容は異なるだろうと思う。それでもなお、もし記憶の介在がない行為があるとするなら、その行為の原因は何であるのかという問いが出されるかもしれないが、それに対しては、人間の新たな可能性の萌芽がそこにこそあると言いたい。過去の記憶や経験や学習を原因にしてのみ行為が現出するなら、理論的には、過去以上の行為は出来ないことになる。しかし、人間は後退の部分を抱え込みながらも、確実に進歩して来た。それは科学技術にとどまらず、100メートルを走る時間がコンマ何秒かずつ短縮され続けている驚きの事実を見てもわかるだろう。無論、過去の記憶や経験や学習から得られることは少なくない。むしろそれらによって人間の進歩があったということも確かである。だが、人間の能力に限界と制限を設けるのはその過去の記憶や経験や学習であることもおそらく同様に確かである。

部分の総和以上の新たな局面の現出を「創発」という言葉で表現し得るなら、過去からの積み重ねの上にさらなる飛躍が出来るかどうかは、この創発というような事態が生じるか否かにかかっているように思う。何かに懸命に打ち込んでいる人々に、時としてご褒美のように現れる、何故そうなったかが自分でもわからないこの事態は、過去からの積み重ね以上の何かである。

5. 意識と無意識—可変性のある相互乗り入れ

さて、われわれの随意運動やとっさの行為において、無意識は意識に先立つという事実からわれわれは何を読み取ればいいのか。意識と無意識を表現する一つの有効なメタファーは、豊饒な無意識の海から意識が表出し、また環流して大海をなすというものである。この場合、海の表層と深層は分断も分割も出来ないのであるから、意識と無意識の両者を対概念や対立項としてではなく、一つの流れとして捉えていると考えられるが、これから提示する「意識と無意識の相互乗り入れ」のメタファーにおいてもこの考え方は通底している。

一般的に「相互乗り入れ」は主に鉄道で、異なる経営主体同士が互いに相手の路線に車両などを入れて運行することを指す。例えば、筆者が利用している伊豆急行線とJR線は相互乗り入れをしている。東京駅からJR特急踊り子号に乗車すると終点の伊豆急下田駅まで、乗り換えなしで着くのである。このメタファーで表したいのは、伝達される‘何か’が異質性を感じることなく、つまり、当の本人が気付くことなく意識から無意識に、また、無意識から意識へ、それぞれの間を行き来しているさまである。同時にそれは、意識とも無意識と

も名付けられず、常に変化し修正される可変性を有しているだろうと思われる。もし可変性がないなら、この共通部分は固定化されてしまい、新たな意識、新たな無意識が生み出されることがなく、したがって、新たな行為や創発の事態が生まれないことになってしまう。さらに、意識と無意識がつながれ、互いの領域に乗り入れる頻度が多ければ多いほど、共通部分は強化され、その範囲が拡張されると考えられる。これは、近年の神経科学によって主張されている脳の可塑性、すなわち「ニューロン間の接続は回路の使用につれて補強されたり手直しされたりする⁴⁰⁾」ということと相通ずるものがある。だが、繰り返しの修練によって、職人のカンが磨かれることや、難度の高いワザがその人の体にしみこむという事態は、単に脳を鍛える以上の何かが必要であり、それは身体全体の問題である。

ところで、「無意識を認識するのは意識である」という記述は正しいのだろうか。仮に、意識が無意識を認識できるなら、われわれは無意識を言葉にすることが可能なはずだが、われわれは自分自身に現実に起きている事態を完全に記述し尽すことは出来ない。試みに、昨日わが身に起こった出来事や行為について、それが生じた明確な理由や経緯を記述しようとしても不可能であることにすぐさま気付かれると思う。現実の事態を記述出来ない原因は言葉という道具の使い勝手の悪さにもあり、単に言語化されない無意識のせいばかりではないが、われわれが意識あるいは認識できる範囲はごくわずかであり、無意識の領域にまで認識が及ぶと考えるのは幻想に過ぎないのではないかと思う。S. プリーストの「意識は存在しない⁴¹⁾」と言う主張を全面的に受け入れるわけにはいかないが、意識の存在証明は出来ず、まして無意識の存在を証明することが出来ないことは一つの事実である。存在を証明することが出来ないことをもって、意識や無意識がないということにはならないが、無意識はどのようにしても認識され得ないからこそ無意識なのではないか。確からしさという点では、意識も無意識も共に一步引かざるを得ないが、その不確かなものにわれわれ自身が苦しんだり、恐れを抱いたり、歓喜したりしているのであるから、意識も無意識も哲学の材料にはなるだろう。

われわれの日常生活すなわち人生は予定調和的でもなければ、予測可能でもない。無意識が意識より先に動いているのなら、単に気を持ちようを変える、視点を変えるというような小手先の細工では間に合わないことになる。そこで期待されるのが先ほど述べた「意識と無意識の相互乗り入れ」である。これは特別な事象ではないが、同時に一切の行為に生じるというのでもないだろう。一例を挙げるなら、われわれの歩行である。われわれは日常的に歩行しているが、その漫然な繰り返しによって歩行が上達するということは余りない。むしろ加齢による身体の衰えと共に、長年の習慣による癖で、歩くことさえ下手になっているのが概ね一般的である。だが、身体から発信されるサインに気付きながら、単に歩くという行為においてさえ姿勢や重心の移動に注意を払うなら、歩行も十分に訓練の域に入る。このような習練を含む反復訓練における身体の生理的、機能的な変化とそれに伴う意識、無意識の変

化によって、「意識と無意識の相互乗り入れ」が生じると考えられる。

われわれの意識的行為が存外に無意識のはたらきに負うところが多く、加えて脳の複雑なはたらきが有機的に絡んでおり、先のR. ユングの実験でなされた目標のものを叩くという些細な事実についてさえ、われわれが知りうることは余りに少ない。目標のものまでの距離と位置を測り、さらに神経インパルスなどのはたらきによって腕を伸ばして叩くという動作に移行するためには、視神経や脳、身体全体及び腕や手の筋、皮膚感覚等の間で様々な情報のやりとりがあり、それぞれにおいて情報の読み替えが行われていることは容易に想像されるが、それらの無数の翻訳作業は単純ではないだろう⁴²⁾。何度練習しても逆上がりが出来ないようなままならぬ状況は、意識にとって都合のいいことが筋にとっては都合の悪い状況である。まして行為そのものではなく、行為の結果が重視されるなら、翻訳にさまざまなバイアスも掛かる。例えば、叩いたものが自分のものになるという設定なら、自ずと動きに真剣さが増し、叩く動作の力加減も変化するだろう。

また、行為の実行が実行しないということの否定から生じるというのは一面的な見方に過ぎないと思うが、目標のものを叩くという行為を実行しないという選択肢を棄てて、叩くという行為を実行することは、大げさに言えば世界との対峙であり、行為の次元への思い切った跳躍がそこにはあるだろう。実験室の外にあるわれわれの日常生活では、叩いたことによって状況が一変するようなことは度々起こる。われわれは行為に伴うさまざまな変化を、好むと好まざるとに拘わらず受容せざるをえないのである。理論と実践（行為）の次元の違いはこの点においても明確である。

一方、「行為しようとした」、「行動したいと思った」時点より前に、脳が反応していることを根拠にして、われわれの行為は脳に司られているということになるのだろうか。脳が意識と密接不可分であることを肯うことにやぶさかではないが、果たして脳は無意識を支配し、われわれの行為をも支配しているのだろうか。脳は他の器官（皮膚や視神経や内臓など）との相互協同的なはたらきによって、経験や体験を積み重ね、時として創発の事態を生み出しながら、常に新たな脳、新たな身体を組織化しているという事態がもし事実なら、われわれは脳の支配に甘んじることはないだろう。それがどのようにして証明されるかはわからないが、案外多くの人々に思い当たることのあるのではないだろうか。抽象的な議論を避けるためにも、ここで具体例を挙げて考えてみたい。

卑近な例で恐縮だが、筆者は下手の横好きで合気道をたしなんでいる。一般的に（合気の）ワザを掛けるというが、何度繰り返して修練しても掛からなかったワザが、ある時ふつと出来ることがある。だが一度出来ても、次にまた出来るとは限らない。そこでまた何度も繰り返して練習するのであるが、出来た時の成功体験が積み重なると、「あの感じ」という何かつかめるようになる。脳や身体で「あの感じ」がイメージ出来ると、「あの感じ」が具体化される。つまりワザが掛かるようになるのである。この一連の経過を見ると、何度修

練してもワザが掛からなかった時は脳も身体もワザを掛けるに見合う技量が足りず、「あの感じ」を持つことが出来なかったが、一度成功すると、脳も身体も総動員でその成功の再生を試みる。身体を修正し調整をして、ワザに適った身体の動きを身体自身が覚えるまでは意識的な動作の訓練が必要であるが、ワザが掛かる時は自分でも分らないが、それが出来てしまっているのである。これを幾分か誇張して、「脳や身体の自己組織化」、または「脳と身体が協同連携して新たな自己を創発した」と勿体振ることも出来るが、そのような言い回しに対しては、「言うは易く、行うは難し」と反論してみたくもなる。ともあれ、ここでは一先ず、脳が身体の階層構造のトップに君臨しているということは否認され、われわれの行為は脳の入出力という簡単な系だけでは説明が付かないことだけは指摘できよう。また、除脳されたネコが歩くことや脊髄の神経回路による運動パターンの生成化なども実証されつつあり⁴³⁾、もはや脳の絶対的優位はおびやかされていると言えるだろう。

6. 結びにかえて

以上、行為と意識・無意識について考察した。初めに、意識の中でも行為の主たる要因に挙げられる意志を検討したが、思考や願望その他を含む深奥で複雑な意識の内容から意志だけを抽出することは困難であり、言葉のあいまいさはもとより、はたらきの度合いとしても明確にはならない。さらに冒頭でも述べたように、行為は行為がなされるまでは行為が確定せず常に未決定を含んでいるのであるから、「～しよう」と意志することを行為の範疇に組み入れることは合理性を欠いていると結論して差し支えないと思う。また、あらためて言うまでもないが、思考や願望なども同様に行為の範疇には入らないだろう。

また、実験に基づいた神経生理学的な観点を取り入れて行為を再考したが、随意運動やとっさの行為においても、無意識は意識に先立つという事実を受けてわれわれが目指したのは、身体に注意を向けながらの繰り返しの鍛錬や倦むことのない習練によって拓かれる、意識と無意識が相互に乗り入れるような事態を具体的に実現することであった。何故なら、意識より先に無意識が動いてしまっているのであるから、意識の変革以上に無意識を促すような身体のありようが重要であり、新たな自己を生み出す可能性の萌芽がまさに行為に内在されているのである。だが、「意識と無意識の相互乗り入れ」を意図的に作ることはおそらく不可能であり、徒労に帰するだろう。あたかも、昨夜見た夢を意図して再現することが出来ないが如きである。

参考文献

Richard Jung, 1982, "Postural support of goal-directed movements : The preparation and guidance of voluntary action in man" *Acta Biologica Academiae Scientiarum Hungaricae*, Vol. 33, No. 2-3, pp. 201-213.

ウイトゲンシュタイン、1975年、「草稿」、『ウイトゲンシュタイン全集1』、奥雅博訳、大修館書店。

奥雅博、2001年、『ウイトゲンシュタインと奥雅博の三十五年』、勁草書房。

河本英夫、2006年、『システム現象学 オートポイエーシスの第四領域』、新曜社。

ケネス・ローズ、2005年、『やさしいダンスの物理学』、蘆田ひろみ監訳、大修館書店。

多賀巖太郎、2002年、『脳と身体の動的デザイン 運動・知覚の非線形力学と発達』、金子書房。

浜田寿美男、2002年、『身体から表象へ』、ミネルヴァ書房。

フランソワ・アンセルメ+ピエール・マジストレッティ、2006年、『脳と無意識 ニューロンと可塑性』、長野敬他訳、青土社。

プリースト, S.、1999年、『心と身体の哲学』、河野哲也他訳、勁草書房。

ベンジャミン・リベット、2005年、『マインドタイム』、下條信輔訳、岩波書店。

ホブソン, J. A.、2001年、『意識と脳』、澤口俊之訳、日経サイエンス社。

本田仁視、2009年、『視覚世界はなぜ安定して見えるのか 眼球運動と神経信号をめぐる研究』、知泉書館。

松村道一、2003年、『脳科学への招待』、サイエンス社。

ヤング, J. Z.、1992年、『哲学と脳』、河内十郎他訳、紀伊國屋書店。

インターネット資料

千島 亮他、「運動関連脳電位 (MRCP) 応用によるコミュニケーション支援技術の基礎的検討」、2008年 第28回 日本生体医工学会 甲信越支部大会講演論文集 (電子論文集)、<http://jsmbe.eng.niigata-u.ac.jp/Proceedings/ProcJSMBE-KSE2008.pdf>.

註

¹⁾ ウイトゲンシュタイン、「草稿」、『ウイトゲンシュタイン全集1』、280頁

²⁾ ウイトゲンシュタイン、同書、254頁

³⁾ ウイトゲンシュタイン、同書、同頁

⁴⁾ ウイトゲンシュタイン、同書、261頁

⁵⁾ ウイトゲンシュタイン、同書、278頁

⁶⁾ ウイトゲンシュタイン、同書、282頁

⁷⁾ 奥雅博はウイトゲンシュタインの意志に関する論点を三つ挙げている。(○番号は筆者)

- ① [食事の時にスプーンを持ち上げるような] 容易な行為の場合、「その行為を行おうと努める」ということが不適切であり、独立に意志を抽出できない。②重いバーベルを持ち上げようと努めることができるのに対し、「意志することを努める」ことができない限りにおいて、意志は行為ではない。③「よく考えろ」と命令できるが、「よく考えることを意志せよ」と命じることはできない。それ故この限りで意志は独立の行為ではない。(奥雅博、『ワイトゲンシュタインと奥雅博の三十五年』、184頁)
- ⁸⁾ 心理学・精神分析学者のC. ユングと区別するため、拙稿ではこれ以降「R. ユング」と記す。
- ⁹⁾ Richard Jung (R. ユング)、“*Postural support of goal-directed movements : The preparation and guidance of voluntary action in man*”, p. 203
- ¹⁰⁾ R. ユング、同記事、pp. 201–213.
- ¹¹⁾ ヤング、J. Z.、『哲学と脳』、133～134頁
- ¹²⁾ 本田仁視に拠れば、サッカド (saccade) とは、読書や運転などの日常の視覚行動において、視線を変えるたびに頻繁に生じる急速な眼球運動であり、飛躍眼球運動、飛越眼球運動などとも呼ばれる。他方、動いているものを目で追う時に生じる眼球運動は追跡眼球運動と呼ばれるが、両者とも随意性の眼球運動である。これら以外に、ヒトの眼球運動にはさまざまな非随意性の反射的な眼球運動 (前庭動眼反射、前庭性眼振、視運動性眼振など) がある、とされている。(本田仁視、『視覚世界はなぜ安定して見えるのか 眼球運動と神経信号をめぐる研究』、注17頁)
- ¹³⁾ R. ユング、前掲記事、pp. 205–206. なお、原文で事項番号は1., 2., ……であるが、拙稿の章、及び註番号との混同を避けるため、○囲み数字で表記した。
- ¹⁴⁾ R. ユング、前掲記事、p. 203
- ¹⁵⁾ ベンジャミン・リベット、『マインドタイム』第四章「行為を促す意図」参照。「自発的な行為に繋がるプロセスは、行為を促す意識を伴った意志が現れるずっと前に脳で無意識に起動します。これは、もし自由意志というものがあっても、自由意志が自発的な行為を起動しているのではないことを意味します。」(リベット、同書、159頁)
- ¹⁶⁾ 「運動関連脳電位 (MRCP) 応用によるコミュニケーション支援技術の基礎的検討」(千鳥 亮他、2008年 第28回 日本生体医工学会 甲信越支部大会講演論文集〈電子論文集〉)、<http://jsmbe.eng.niigata-u.ac.jp/Proceedings/ProcJSMBE-KSE2008.pdf>、最終アクセス、2010年9月17日)
- ¹⁷⁾ R. ユング、前掲記事、p. 204.
- ¹⁸⁾ R. ユング、同記事、p. 207.
- ¹⁹⁾ 「いくつかの短い姿勢の安定 [のための動作] は、しっかりした足場が確保されるまで続き、それから次の動作が始まる。」(R. ユング、同記事、p. 204.)
- ²⁰⁾ ケネス・ローズ、『やさしいダンスの物理学』、185頁。
- ²¹⁾ ホブソン、J. A.、『意識と脳』、28頁。
- ²²⁾ R. ユング、前掲記事、pp. 208～210.
- ²³⁾ R. ユング、同記事、p. 202.
- ²⁴⁾ ちなみに、手元にある本では、分子生物学者のジョンジョー・マクファデン著『量子進化』、精神医学者の計見一雄著『脳と人間』、複雑系科学者の池上高志著『動きが生命をつくる』などでも採り上げられている。
- ²⁵⁾ リベット、前掲書、165頁。
- ²⁶⁾ リベット、同書、160頁。
- ²⁷⁾ リベット、同書、166頁。

- ²⁸⁾「自発的プロセスが、意識を伴った意志が現れる前に無意識に起動していたとしても、この意識的意志の役割は、自発的行為が最終的に現れるのを制御することであるという可能性がありません。」(リベット、同書、169頁)
- ²⁹⁾リベット、同書、171頁。
- ³⁰⁾リベット、同書、168頁。
- ³¹⁾リベット、同書、161～162頁。
- ³²⁾リベット、同書、166～167頁。
- ³³⁾リベット、同書、129頁。
- ³⁴⁾リベット、同書、130頁。
- ³⁵⁾R. ユング、前掲記事、p. 211.
- ³⁶⁾リベット、前掲書、129頁。
- ³⁷⁾河本英夫、『システム現象学 オートポイエーシスの第四領域』、51頁。
- ³⁸⁾浜田寿美男、『身体から表象へ』、77頁。
- ³⁹⁾河本、同書、340頁。
- ⁴⁰⁾フランソワ・アンセルメ+ピエール・マジストレッティ、『脳と無意識 ニューロンと可塑性』、240頁。
- ⁴¹⁾プリースト, S.、『心と身体の哲学』、346頁。
- ⁴²⁾神経科学者の松村道一は、われわれが手を伸ばすような場合、脳内でユークリッド座標によって表現された情報を、肩・肘・手首などの運動を制御する身体座標に変換しなければならず、神経回路網がこのベクトル演算を行っていると言っている。(松村道一、『脳科学への招待』、123頁)
- ⁴³⁾多賀巖太郎、『脳と身体の動的デザイン 運動・知覚の非線形力学と発達』、33～37頁。

Action, Consciousness and Unconsciousness

OKAMOTO, Sayuri

Abstract

How useful is the will as a mental element in our action? Does it belong under the category of action? It is difficult to extract only the will from the factors of arcane and profound consciousness, which contains thoughts, wishes, decisions etc. Besides, it is unclear what is meant by 'will', and furthermore, the word 'will' itself is ambiguous. Action is unpredictable because it is not achieved until it is performed practically. These viewpoints help us find answers to the above questions. This study aims to clarify that the germ of a possibility of new self-creation is only inherent in our practical action. I would like to consider our actions from the neurophysiology viewpoint. Richard Jung's and Benjamin Libet's (both neurophysiologists) experiments clearly demonstrate that unconsciousness precedes consciousness in our action. I examine the reciprocal interaction between consciousness and unconsciousness on the basis of their experimental results, and I use the 'mutual trackage agreement' as a metaphor to explain it.

Key words : Action, Will, Consciousness, Unconsciousness, Neurophysiology,
Richard Jung, Benjamin Libet, Mutual trackage agreement